和林興元閣新考

白　石　典　之・D.ツェヴェーンドルジ

1．問題の所在

1256年、モンゴル帝国の漠北における中心地カラコルム Kharakhorum[(1)]に壮麗な仏閣が造営された。高さ約90m と伝えられるこの建物は、当初は「大閣寺」とよばれていたが、1346年、時の元朝皇帝（モンゴル帝国君主）トゴンテムル（順帝）によって「興元閣」と名づけられた。その経緯と寺院の縁起は、許有壬（1287－1364）が漢文で記した『勅賜興元閣碑』に残る。

この『勅賜興元閣碑』は、実際にカラコルムに立石されていた。カラコルム遺跡に南接し、1586年に建立されたエルデネ＝ゾー Erdene Zuu 寺院の建築材の中に、『勅賜興元閣碑』の残片が紛れ込んでいたことが、19世紀末に明らかになった。しかも碑文は片面に漢文、もう一方の面にウイグル文字モンゴル語で同じ内容が刻まれた、いわゆる漢蒙合璧碑であった。

『勅賜興元閣碑』の研究史を紐解こう。本碑が存在することを初めて報告したのは李文田であった。彼はエルデネ＝ゾー寺院内に残された、元朝時代に刻まれた漢文石碑に注目し、1897年に『和林金石録』としてテキストのみを公表した（李 1979）。だが、それより広く学界に本碑の存在を知らしめた報告としては、ロシア学士院派遣探検隊のラドロフ V.V.Radloff が編集した『モンゴル古代遺跡地図』があげられよう（Radloff 1892）。そこには『勅賜興元閣碑』の２破片から採った３枚の拓本[(2)]が収録されている。しかしラドロフは、李文田とは違い、それが『勅賜興元閣碑』の一部であることに気づかなかった。

その後1912年にポーランドのコトヴィチ V.L.Kotvich が蒙文面の３破片をエルデネ＝ゾー寺院で発見、つづいて1926年にソ連のポッペ N.N.Poppe も同寺院から蒙文面の残る２破片を発見し報告した。これらのウイグル文字モンゴル

(1)　漢文史料では「哈剌和林」、多くの場合「和林」と略して登場する。

(2)　破断面や文章の位置関係から、１破片では蒙文面、もう１破片からは漢文面と蒙文面を採拓したものと推定できる。

語が、いずれも『勅賜興元閣碑』の一部であることを明らかにしたのは、1930年に出されたフランスのペリオ P.Pelliot の研究によってであった。以上の発見によりモンゴル語テキストの研究は進んだ。[3]

さらに、『至正集』所収の『勅賜興元閣碑』に基づき、既存の破片と史料から漢字面と蒙文面の復元的研究をしたのがアメリカのクリーブス F.W.Cleaves であった（Cleaves 1952）。これは現在までのテキスト研究における到達点であると言えよう。

以後これらの破片は、その所在がつかめなくなっていたが、ラドロフ採拓の1破片がウランバートルの科学アカデミー歴史研究所に収蔵されていることが明らかになり、再検討が始まった（Törbat 1987）。また、2003年にドイツのカラコルム調査団によってエルデネ＝ゾー内から新たな破片が発見され、碑文の冒頭のかなりの部分が遺存していることが明らかになった（Dschingis Khan 2005）。これについては松川節の詳しい釈読が公表されている（松川 2006）。

以上のように、これまでのところラドロフの2破片、コトヴィチの3破片、ポッペの2破片、ドイツ隊の1破片と、計8破片が報告されている。[4]『勅賜興元閣碑』のテキスト研究は今後も着実に深化していくことであろう。しかしながら、これらいずれの破片もエルデネ＝ゾー寺院の建築材として搬入され再利用したものであり、その発見された場所が立石の原位置ではない。碑石が本来何処に立っていたか、すなわち興元閣がどこに建っていたかという、『勅賜興元閣碑』研究の一義的課題が手つかずのままなのである。

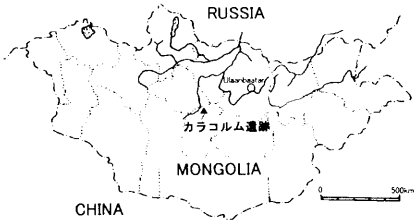

図1　カラコルム遺跡位置図

(3)　コトヴィチ、ポッペ、ペリオの研究は松川節（2006:74－75）を参照した。

(4)　ザガスター K.Sagaster はこれまでに8破片が発見されていると述べるが（Dschingis Khan 2005:150）、ラドロフの3拓本を3破片とカウントしたものであろうか。所在のわからないものがあり、その経緯は不明である。いずれにしても、既知の断片もさらに破砕が進んでいて、破片点数による資料提示のあり方は見直すことになろう。図5に示した松川節（2006）の取り組みが注目される。

じつはこの問題については、2000年から2004年まで行われてきたドイツとモンゴルとの共同調査で、カラコルム遺跡西南隅の「万安宮」跡とされてきた大型建物跡が、興元閣の跡だという意見が提出され、近年議論が活発化している（Hüttel 2005:140－146）。

そのような中、筆者らはこの課題を解明する上で重要になると確信する『勅賜興元閣碑』の新たな破片を発見し、検討する機会を得た。本稿ではそれをもとに、近年のカラコルム遺跡での考古学的発見を合わせながら、興元閣の位置について考察したいと考えている。

2．1984年発見の新破片

カラコルム遺跡はモンゴルの首都ウランバートルから西に約320km、ウブルハンガイ Övörkhangai 県ハルホリン Kharkhorin 郡にある（図1）。1984年、モンゴル科学アカデミー歴史研究所のセル＝オドジャヴ N.Ser-Odjav と、筆者の一人ツェヴェーンドルジ D.Tseveendorj は、カラコルム遺跡南西隅にある大型建物跡を調査した（図2）。そこは1948－49年にソ連のキセリョフ S.V. Kiselev の発掘調査で、モンゴル帝国第2代君主のウゲデイ（オゴデイ）によって1235年に建てられた宮殿「万安宮」跡だとされた場所である（Kiselev *et al.* 1956）。2重のレンガ壁に囲まれた中央に、裾部分で長軸（ほぼ南北）70m、

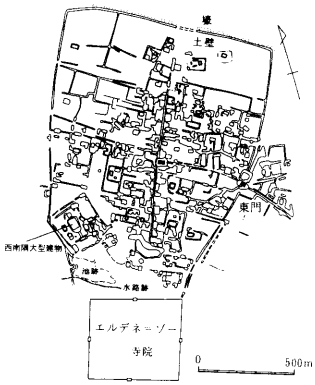

図2　カラコルム遺跡全体図

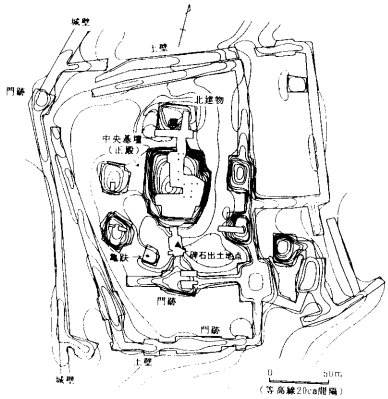

図3　西南隅大型建物全体図

短軸（ほぼ東西）50m、高さ3.5mの建物基壇が残る、遺跡内最大級の遺構である（図3）。

ツェヴェーンドルジらは基壇の南裾部分、おそらく建物入り口につながる階段あるいはスロープのあった場所の発掘調査を行った。その「B調査区」とした部分の地中約20cmから、石碑の断片が出土した。破片はカコウ岩製で、磨きあげられた平坦面は一面だけで、おそらく存在したはずの背面（もう一方の平坦面）は欠損し、厚さは13cmほどであった。平坦面は縦25cm、横40cmで、そこに漢字14文字が刻まれていた（Ser-Odjav・Tseveendorj 1984:4）。その後、この碑文については検討されることなく、歴史研究所の収蔵庫に保管されていた。

1997年にモンゴル科学アカデミー歴史研究所に留学した白石は、当時の指導教官であったツェヴェーンドルジからこの碑文の研究を任された。そこで白石は計測および採拓を行った（図4）。碑石破片にはつぎのように刻まれていた。

1行目：雷雨暘

2行目：乎天徳

3行目：邁五漢而

4行目：説以格蚩（3行目と4行目の間はちょうど1行分の間隔が空いている。）

図4　1984年発見の碑石破片拓本（白石1997年採拓）

元朝における各種文集類を検索した結果、これが許有壬撰『至正集』所収の『勅賜興元閣碑』文の一部と一致することがわかった。[5] これを、以下に掲げた『勅賜興元閣碑』の文章と見比べれば、同一文であることは明らかであろう。1984年発見の部分はゴシックになっている。なお下線部で示した個所は、これまでに破片が見つかっている部分である。[6] 行数は、松川節が想定した碑文のレイアウト復元案による（図５、松川 2006:77）。

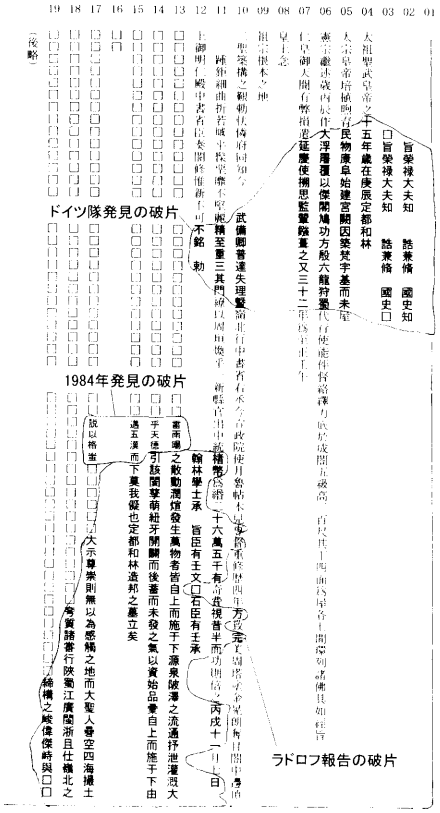

図５　『勅賜興元閣碑』漢字面レイアウト案（松川2006:77に加筆）

(5)　このあたりの経緯については別の拙著に詳しい（白石　2006:176－180）。

(6)　『至正集』の文章と碑石との間で、若干の文字の違いがある。その場合は碑石に従った。

松川案によると、本破片は『勅賜興元閣碑』漢字面の13行目～17行目の中段部分に相当し、しかもラドロフ採拓の破片（XLI－2）の直上にあたる。残念ながら、現在このラドロフの破片は所在不明だが、本破片と接合することが期待できる。

勅賜興元閣碑

01：

02：　　旨榮禄大夫知　　誥兼脩　國史知

03：　　□旨榮禄大夫知　　誥兼脩　國史□

04：太祖聖武皇帝之十五年歳在庚辰定都和林

05：太宗皇帝培植煦育民物康阜始建宮闕因築梵宇基而未屋

06：憲宗継述歳丙辰作大浮屠覆以傑閣鳩工方殷六龍狩蜀代工使能伻督絡繹力底於成閣五級高三百尺其下四面為屋各七間環列諸佛具如経旨至大辛亥

07：仁皇御天聞有弊損遣延慶使搠思監輦鐵葺之又三十二年為至正壬午

08：皇上念

09：祖宗根本之地

10：二聖築構之艱勅怯憐府同知今武備卿普達失理曁嶺北行中書省右丞今宣政院使月魯帖木兒専督重修歴四年方致完美周塔塗金晃朗奪目閣中辺頂

11：踵鉅細曲折若墉平槎堊靡不堅麗精至重三其門繚以周垣煥乎一新縣官出中統楮幣為緡二十六萬五十有奇費視昔半而功則倍之丙戌十一月七日

12：上御明仁殿中書省臣奏閣修惟新不可不銘勅翰林学士承旨臣有壬文諸石臣有壬承

13：拝首稽首而言曰天地運用之妙臣無得而名焉即其形迹近者言之風**雷雨暘**之散動潤烜發生萬物者皆自上而施於下源泉陂澤之流通抒泄灌漑大

14：田者亦由高以及乎卑我國家興王之地俯瞰萬國大聖人首出庶物位**乎天徳**引該関孳萌紐牙開闢而後蓄而未發之氣以資始品彙自上而施於下由

15：高以及乎卑故澤之流若高屋之建瓴師之出如泰山之墜石功烈之成登三**邁五漢而**下莫我儗也定都和林造邦之基立矣

16：太宗

17：憲宗雖干戈間而以不嗜殺人為心聞象教清浄覺皇慈仁之旨有契宸衷資其**説以格蚩**蚩之未格者非大示尊崇則無以為感觸之地而大聖人礨空四海撮土

18：八埏囊括宇宙席捲河山之量實兆朕於是馬臣有壬生長熙洽之世朔南名刹罔不

歴観聞嶺北人譴閣之大竊疑其夸質諸嘗行陜蜀江廣閩浙且任嶺北之

19：人信天下之閣無與為比也昔祇桓寺基八十頃一百二十院祇陀須達二人成之我國家富有四海視布地之金特錙銖耳則此閣締構之峻偉傑峙與雪山

20：相高鷲嶺侔盛宜也閣始無名但以大閣寺著称皇上賜名曰興元之閣（以下略）

3．興元閣の位置

以上のことから、本資料が『勅賜興元閣碑』の一部であることは疑い得ないことであるが、さらに重要なのは、唯一の学術発掘調査による出土品ということである。その出土地点がこの碑石が立っていた原位置であり、興元閣の可能性が高いのである。

本破片が出土した地点から西に約25m のところには、全長265cm、胴幅126cm のカコウ岩製の亀趺（亀形の石碑の台座）がある（図６）。碑石（碑身）をのせる部分（駝峯）[(7)]の幅は40cm であった。両文面の残る破片から知る『勅賜興元閣碑』の厚さも40cm で（Dschingis Khan 2005:150）、両者は一致する。この亀趺が『勅賜興元閣碑』の台座であったとみて問題はない。さらに、亀趺と出土地点との距離は約25m と近接していた[(8)]。この亀趺に立っていた碑石が、なんらかの理由で破損して、周辺の地中に埋蔵されていたものと考えてよい。そうであるならば、この亀趺の後背にある大型建物基壇こそが、「興元閣」跡ということになろう。

この大型建物基壇では、2000年からドイツ考古学研究所とボン大学が中心となって、考古学的発掘調査が行われている。調査者のヒュッテル H-G. Hüttel によると（Hüttel 2005:145）、基壇上面の平坦面は約40m×約40m の正方形で、間口方向に８基、奥行き方向

図６　西南隅大型建物跡前の亀趺

(7)　竹島卓一『営造方式の研究』（1970:234）参照。

(8)　亀趺は原位置にあるとは言えないが、その大きさと重量からみて、長い距離を動かされたとは考えられない。この大型建物基壇に伴うものと推断する。

に8基と64基の礎石をもつ[9]、総柱建物があったことがわかった（図7）。礎石は方形あるいは円形で、一辺あるいは直径が1～2mにも及ぶ大型なものであった。おそらくかなり太い柱材が使用されていたと想定できるとともに、総柱建築であることから、重量のある大型の構造物が立っていたことを窺わせる[10]。また、間口、奥行きともに礎石は8基であったが、そうならば柱間は7間ということになる。このことは「部屋の四面ともに七間であった（其下四面為屋各七間）」という文章とも一致する。寺院ならばそれに関連する遺物が出土するはずである。大型建物基壇からは、すでに1949年のキセリョフの調査において、仏像が描かれたフレスコ画片が大量に出土していた（Kiselev *et al*. 1956:167－173）。今回のドイツ隊の調査でも、仏像（塑像）が10数体分出土している（Dschingis Khan 2005:154－167）。以上を踏まえて調査者のヒュッテルは、この大型基壇上に興元閣が建っていたと想定した（Hüttel 2005:140－146）。

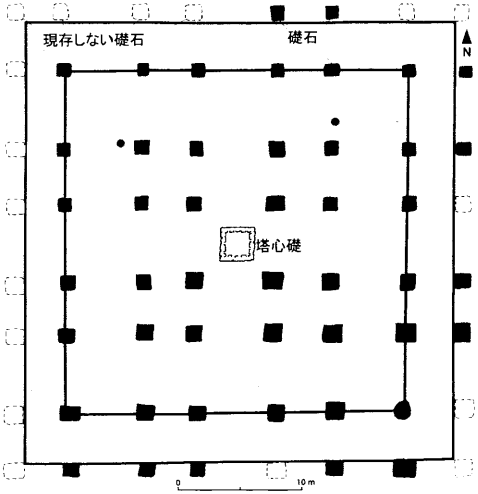

図7　西南隅大型建物礎石配置復元
（Hüttel 2005:145を改変）

このヒュッテルの想定は、今回紹介した碑石破片の出土位置・状況を加味することにより、歴史的事実として具体的根拠をもつことになろう。この大型建物基壇が「興元閣」跡だと断定できると考える。

---

(9) 奥行き方向最西の1列は痕跡のみで礎石は見つかっていない。しかし、左右対称のバランスを考えると、たしかにこの1列にも礎石が存在していたはずである。

(10) 「大きな塔で、その閣は五層から成り、高さは三百尺（およそ90m）あった（大浮屠……閣五級高三百尺）」という碑文のとおり、高層建築がここに聳え立っていたと考えてよかろう。

4．興元閣と万安宮との関係

しかしながら、キセリョフの調査以来、この西南隅大型建物基壇は、1235年に当時の君主ウゲデイが造営した宮殿「万安宮」と考えられてきた。[11] 都市の西南隅という宮殿としては風変わりな位置は、たとえばマルコ＝ポーロの『世界の叙述（東方見聞録）』の内容とも一致する（愛宕訳 1970:137）。マルコ＝ポーロの実在の如何（杉山 1995:20－21,236）はともかく、元朝期に奇妙な配置が人口に膾炙していたことは確かであろう。

これまで筆者両名もキセリョフ説に対し、まったく疑いをもたなかった。ところが、この建物が万安宮ではなく興元閣だということなると、自説を修正する必要と、同時に、真の万安宮は何処なのかという疑問が生じる。

ヒュッテルは、万安宮のあった基壇を再利用して、のちに「興元閣」と名づけられた仏閣が造られたと想定している。大きな根拠として、基壇の地層には何回かの改修の痕跡が確認できたという考古学的所見をあげている（Hüttel 2005:146）。

筆者もこの意見に賛成である。『至正集』に収録されている『勅賜興元閣碑』文の冒頭には、ウゲデイ（太宗）が造った宮殿（「宮闕」）に、モンケ（憲宗）が丙辰（1256年）に興元閣の前身の巨大な寺塔（「大浮屠」）を築いたと取れる文章が出てくる（「太宗皇帝培植煦育民物康阜、始建宮闕因築梵宇基、而未屋。憲宗継述、歳丙辰作大浮屠」）。この「宮闕」が万安宮ならば、ヒュッテルの想定どおりだと言えるからである。

つぎに、カラコルムの市街地プランをみると、この建物が都市計画の中で重要な位置を占めているからである。それは、遺跡全体の測量図の上に、当時の一里（約569m）で碁盤の目状に方眼（グリッド）をつくり、それを子午線から約30度東に傾く都市の主軸に合わせて重ねてみるとわかる（白石 2002:222－227）。この建物を基点のひとつとして、城壁や主要建物が１里あるいは半里の方眼上に規則的に配置されていたことがわかる（図８）。また、都市の城壁は、この建物の周壁を一部利用して築かれていた。つまり、この建物が都市造営の

---

(11) 『元史』巻２「（太宗）七年乙未春、城和林、作萬安宮。」「八年丙申正月、諸王各治具来会宴。万安宮落成。」

当初から存在していなければおかしいのだ。この「大浮屠」が建てられたのは、カラコルムが首都になってから20年も経ってからのことだった。『元史』巻3憲宗紀に「(元年)罷築和林城役千五百人」とあり、憲宗元年(1251)に和林城造営は終了していたことがわかる。「大浮屠」の造営は1256年のことであった。ウゲデイの時期に造営されていた建物を基礎にして、「大浮屠」が建立されたと考えるべきであろう。

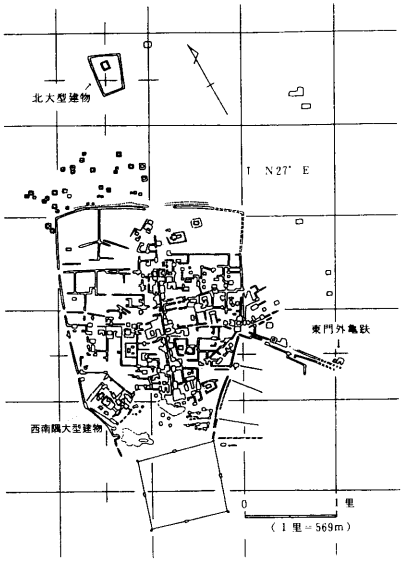

図8　カラコルム都市計画

さらにもうひとつの根拠は、カラコルム北方約40kmにあるドイティン=バルガス Doityn balgas 遺跡の建物にある。この遺跡は1237年に築かれたウゲデイの春離宮「迦堅茶寒殿」跡である。[12] その基礎部分のプランと、「万安宮」と言われてきたカラコルム西南隅大型建物のプランとは、まったく同じであることがわかっている(図9、白石 2002:234－235、Shiraishi 2004:111)。迦堅茶寒殿は万安宮の竣工の翌年に建てられた。近接する時間と、宮殿という同一機能からみて、両者の企画が類似していても不思議ではない。

1252～53年にかけてカラコルムに滞在したペルシャ人ジュワイニーは『世界征服者の歴史』のなかで「この春離宮は、中国人の建築(万安宮)を軽蔑するイスラム人が造った」(Boyle 訳 1997:237)と述べている。明らかにカラコルムの宮殿を意識した造りであったこ

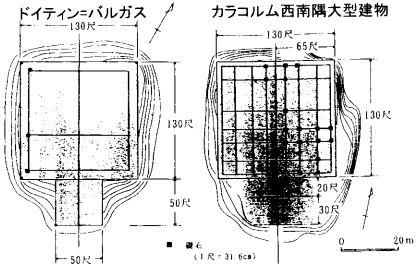

図9　西南隅大型建物と迦堅茶寒殿の比較

(12) 『元史』巻2「(太宗九年)夏四月、築掃隣城、作迦堅茶寒殿。」

とがうかがえる。そうであるならば、逆説的に述べると、春離宮「迦堅茶寒殿」に一致するプランをもつ西南隅大型建物こそが、カラコルムの宮殿「万安宮」だったということになろう。

以上のように考えれば、万安宮を基礎として、興元閣が築かれたというヒュッテルの想定を支持する結論に達する。だが、そうであるならば、さらに新たな疑問が生じる。1256年以降、モンケのカラコルムにおける居所（宮殿）は、どこにあったのであろうか。

『元史』憲宗本紀を読むかぎり、モンケが、1256年から南宋遠征に出陣する1257年陰暦9月まで、カラコルムに立ち寄ったという記述は存在しない(白石2002:71)。そしてモンケは1259年陰暦7月四川釣魚山の陣中で崩じた。つまりモンケが「大浮屠」造営後にカラコルムに滞在したことを史料からは知り得ないのである。つづく君主のクビライは本拠地を漠南に移し、またクビライと帝位を争った弟アリク＝ブケのカラコルムでの動静についても、史料から窺い知ることはできない。1256年以降、カラコルムには“宮殿”とよばれる建物は存在しなかったのか。[13]

しかしながら、興味深い史料が存在する。モンケが“宮殿”を建造していたという記述が残る。陳宜甫撰の『秋巌詩集』巻下所収の五言律詩「丙申秋同錫喇平章重過和林城故宮」には、

昔日憲皇帝　和林建此宮
中原盡朝貢　嘉運会英雄
沙漠皇風遠　蒿萊古殿空
最傷西蜀道　六御不回龍

とある。「昔日、憲皇帝（モンケ）が和林（カラコルム）に此の宮殿を建てた（昔日憲皇帝　和林建此宮）」というのである。題名にある丙申とは1296年のことで、言うまでもなくその時「大浮屠」は存在していたはずである。ウゲデイの万安宮とは異なる、モンケが建てた別の宮殿の存在を示唆する文章である。カラコルムには時期を違えて2つの宮殿が存在した可能性も浮かび上が

---

(13) 1252－53年にカラコルムに滞在したジュワイニー（Boyle 訳 1997:236－239）と、1254年にカラコルムを訪れたギョーム＝ド＝ルブルク（護訳 1989:249－251）は、モンケが壮麗な宮殿をもっていたことを伝える。54年まではカラコルムには確かに“宮殿”とよばれる建物が存在していた。

る。たしかに史料では、モンケは1252年12月に行宮の修築に着手している。[14] それがここでいう「此宮」にあたるのだろうか。

想像をたくましくすれば、モンケにはウゲデイと異なる宮殿を建てる動機があったと言える。カラコルムは元来、モンケの父トルイの領地であり、兄ウゲデイの“身代わり”ということでトルイが怪死した後、ウゲデイ領となった“いわく付き”の土地なのである（松田 1994:288－290、白石 2006:164－166）。ウゲデイの跡を継ぎ、その息子のグユクが第3代君主になるが、グユクは1248年に在位3年で急逝する。その後、後継争いの内紛を経て1251年にモンケが第4代君主に即位すると、彼はウゲデイ家派に対して執拗な粛清を行った。[15] まるで父トルイの無念を払拭したかのように果断であった。モンケの即位によって、トルイ家はようやくウゲデイ家から旧領を奪還できた。そこに建つ万安宮は、ウゲデイ家のシンボルであり、モンケにとっては憎しみの対象であったのかもしれない。

そうであるならば、モンケの宮殿はどこか、という新たな課題が生じるが、推論に推論を重ねることになるので、これ以上の論及は慎もう。後日、文字・物質資料の増加をまって再考したい。

5．結　　語

以上の検討結果をまとめて、擱筆としたい。

① 1984年にカラコルム遺跡西南隅大型建物基壇の南側スロープ部で発見された漢字碑石破片は、1346年に許有壬の撰になる『勅賜興元閣碑』の一部であることを報告した。

② その出土状況と近年の考古学的所見から、この大型建物基壇が「興元閣」跡だと断定した。

③ この大型基壇には、当初は1235年にウゲデイによって築かれた宮殿「万安宮」であったが、1256年にモンケによって「興元閣」の前身となる寺院に改

---

(14) 『元史』巻3「（二年…十二月戊午）徙諸匠五百戸修行宮」。筆者のひとり白石は、この「行宮」をオンギの地に設けられた冬離宮と考えたことがある（白石 2002:266）。別稿で再検討したい。

(15) たとえばラシードの『集史』（Verkhovskii 訳 1960）第2巻133－139頁を参照。

修されたことを論じた。

そのほかにも派生するいくつもの新しい研究課題が得られたが、それらについては後考に委ねたい。今、カラコルム研究が大きく動き出そうとしている。今後の調査を注視していきたい。

本稿を草するにあたり、D.Bayar、A.Enkhtür、伊藤敏雄、松田孝一、松川節、三宅俊彦、A.Ochir、B.Tsogtbaatar、内田宏美の各氏にご教示・ご協力をいただいた。末筆ながら記して深甚なる謝意を表する。

［付記］本稿は平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A）「モンゴル帝国興亡史の解明を目指した環境考古学的研究」（課題番号18202024、代表：白石典之）の成果の一部である。

参考文献

史　料

『至正集』（［元］許有壬撰）：Cleaves,F.W.(1952) The Sino-Mongolian Inscription of 1346. *Harvard Journal of Asiatic Studies*.15 plates. Ⅱ－Ⅵ

『秋巌詩集』（［元］陳宜甫撰）：『四庫全書珍本初集』商務印書館、北京、1934・35年

『元史』（［明］宋濂撰）：中華書局（校点本）、1976年

『旅行記』（ギョーム＝ド＝ルブルク）：護雅夫（訳註）「ルブルクのウィリアム修道士の旅行記」『中央アジア・蒙古旅行記』129－340頁、光風社出版、1989年

『世界の叙述（東方見聞録）』（マルコ＝ポーロ）：愛宕松男（訳注）『東方見聞録』1（東洋文庫）、平凡社、1970年

『集史』(ラシード=アッディーン)：Верховский,Ю.П.（пер.）*Сборник Летописей*. Академия Наук СССР, Ленинград, том Ⅱ：1960

『世界征服者の歴史』（ジュワイニー）：Boyle,J.A.(trans.) *Genghis Khan-The History of the World-Conqueror*. Manchester Univ. and UNESCO, 1997（初版は1958年）

研究文献（abc 順）

Cleaves,F.W.(1952) The Sino-Mongolian Inscription of 1346. *Harvard Journal of Asiatic Studies*.15 pp.1－123 and 12pls.

Dschingis Khan (2005)：*Dschingis Khan und seine Erben. Das Weltreich der Mongolen.* Katalogbuch zur Ausstellung. München

Hüttel,H-G.(2005) Der Palast des Ögedei Khan -Die Archäologischen Institits im Palastbezirk von Karakorum. *Dschingis Khan und seine Erben. Das Weltreich der Mongolen*. Katalogbuch zur Ausstellung. S.140－146, München

Kiselev,S.V. *et al*.(1965) Киселев,С.В. и т.д. *Древнемонгольские города*. Москва

李文田（羅振玉校定）1979『和林金石録』（『石刻史料新編』第2集 ⑮、11461－11479頁所収）新文豊出版公司、台北

松川節 2006「新発現の漢モ対訳『勅賜興元閣碑』碑片」『中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合（科学研究費補助金報告書）』、74－81頁、龍谷大学

松田孝一 1994「トゥルイ家のハンガイの遊牧地」『立命館文学』537号、285－304頁

Radlov,V.V.(1892) Радлов,В.В. *Атласъ древностей Монголии*. Санктпетербургъ

Ser-Odjav,N.,D.Tseveendorj (1984) Сэр-Оджав,Н.,Д.Цэвээндорж *1984оны Хар Хорины шинжилгээний ангийн тайлан*. Монгол Улсын Шинжилэх Ухааны Академи Түүхийн Хүрээлэн. Улаанбаатар

白石典之 2002『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社

白石典之 2006『チンギス・カン～“蒼き狼”の実像～』（中公新書）、中央公論新社

Shiraishi,N.(2004) Seasonal Migrations of the Mongol Emperors and the Peri-Urban Area of Kharakhorum. *International Journal of Asian Studies*, 1－1, pp.105－119, Cambridge Univ. Press

杉山正明 1995『クビライの挑戦』（朝日選書）、朝日新聞社

竹島卓一 1970『営造方式の研究』第1巻、中央公論美術出版

Törbat,Ts.(1997) Төрбат,Ц. Хар Хормын Монгол Бичээсийн Талаар Дахин Өгүүлэх нь. *Түүхийн Судлал*. 30, т.90－97, Монгол Улсын Шинжилэх Ухааны Академи Түүхийн Хүрээлэн. Улаанбаатар